

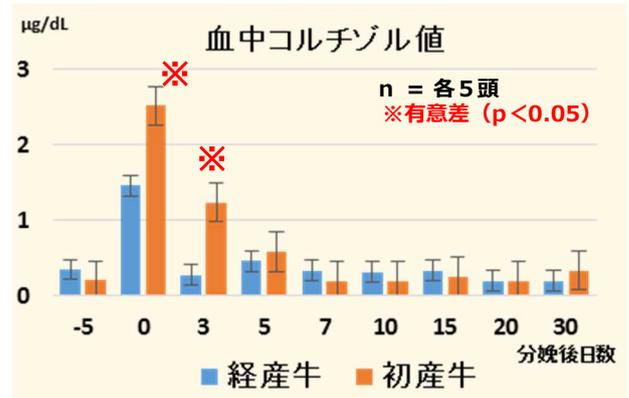
乳用初産牛の死亡・廃用防止技術

畜産研究所

本県の乳用牛は初回分娩時から死亡・廃用率が高く、生乳生産量の低下が課題となっています。そこで、初めての分娩・搾乳を迎える初産牛を生乳生産性の高い健康的な経産牛へ育てる技術を紹介します。

分娩前後における乳牛のストレス

- ◆ 初めて分娩・搾乳を迎える初産牛は経産牛と比較して、**血中コルチゾル値が高く推移し**、大きなストレス負荷がかかっている。
- ◆ 経産牛と初産牛を同じ環境で飼養すると、低乳量や繁殖障害（発情遅延）など**牛本来の能力を発揮できない可能性**がある。



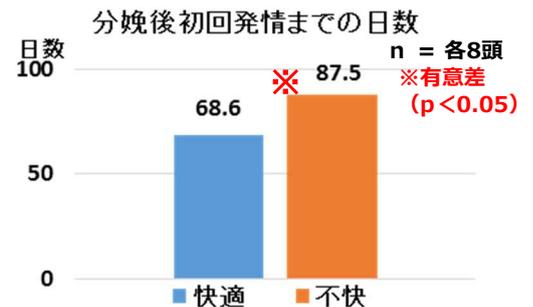
初産牛の死亡・廃用を軽減する技術

牛の配列による影響（繋ぎ飼い牛舎）

- 経産牛に挟まれない配置 **快適**
- × 両隣りに経産牛を配置 **不快**



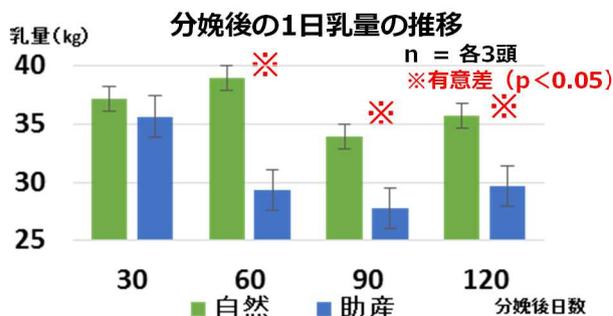
両隣りに経産牛がいると、初産牛は快適性を失い、分娩後の初回発情が遅く次の分娩・搾乳に影響を及ぼす。



- ◆ 両隣りに初産牛を置く
- ◆ 経産牛と間をあけて飼養する

助産の影響

- 自然分娩 **自然**
- × 2次破水後に介助を実施 **助産**



初めての分娩を意識しすぎて、自然分娩を待てずに助産（介助）を行うと乳量が低下し、分娩後の初回発情が遅くなる。

助産は娩出のタイミングを早め母体にダメージ（子宮損傷等）を与える可能性があるため、できるだけ自然分娩を心がけることが望まれる。

お問い合わせ

畜産研究所 酪農飼料環境部 (TEL 0175-64-2790)